

論文の要約

名古屋大学大学院 文学研究科

博士学位論文

論文題目：“真詩”論的形成——程朱理學背景下的詩論發展

氏名：陳 磊

論文の目次は、次の通りである。

緒 論

- 一、引言：“真詩”解題
- 二、既有的研究路徑及其不足之處
 - (一) 研究路徑概述
 - (二) 既有研究路徑的局限
 - (三) 鈴木虎雄の推測
- 三、本文の課題選擇和結構安排
 - (一) 選擇“真詩”作為課題及其理由
 - (二) 本文の結構安排和研究方法

本 論

第一章 “真詩”一語在兩宋之際的第一次出現及其思想背景

- 一、“真詩”の首次出現：《詩總》の引用二、從“詩史”說的回顧看“真詩”觀念的來源
 - (一) 晚唐孟棨の“詩史”說
 - (二) 北宋時期“詩史”說的進一步發展
 - (三) 北宋“詩史”觀與阮閱“真詩”觀的聯繫
 - 三、北宋時期詩論和理學中的“自得”
 - (一) 《西清詩話》の作詩法：“作詩貴乎自得”論
 - (二) 二程理學の治學方法：“自得”論
 - 四、小結
- 第二章 “真詩”一語在金末元初之際の再次出現及其思想背景（上）
- 一、“真詩”の再次出現：《滄南詩話》の引用二、鄭厚の學術思想
 - (一) 鄭厚《藝圃折衷》中の非難聖人之說和他的易學思想

(二) 朱熹對鄭厚之學的看法

(三) 鄭厚對《孫子》兵法的評價

三、鄭樵的學術思想——元祐之學、朱熹與鄭樵的關係

(一) 朱熹對《詩序》的看法和鄭樵《詩序》說的關係

(二) 鄭樵和舊法派主戰官僚以及元祐之學的關係

四、小結

第三章 “真詩”一語在金末元初之際的再次出現及其思想背景（下）

一、鄭厚“真詩”說的歷史語境

(一) 鄭厚的詩韻觀——作為易學在詩論上的一個反映

(二) 鄭厚使用“真”的歷史語境——以晁說之和朱弁為例

二、王若虛對“真詩”的理解

(一) 王若虛宋學批判語境中的“真”

(二) “過高”——王若虛對宋學整體的批判基調

(三) 在宋學批判基調下的“真詩”內涵

三、朱弁的詩論及其對王若虛的影響

四、小結

第四章 程朱理學背景下學者對作詩法的討論——李夢陽建構“真詩”論的理論前提

一、程朱理學對詩文寫作價值的質疑

(一) 周敦頤的“文以載道”說

(二) 程頤的“作文害道”說

(三) 朱熹所主張的作詩法

二、元代至明代前期學者對作詩法的討論

(一) 吳萊、黃潛的“法度”觀

(二) 宋濂的“養氣”觀

(三) 薛瑄的“真情”觀和陳獻章的“誠意”觀

三、小結

第五章 “真詩”一語在明代中期的第三次出現——作為李夢陽詩論體系核心的“真詩”論

一、“法”與“情”：李夢陽詩論的兩個核心概念

二、李夢陽對詩法的兩個比喻和他的復古邏輯

(一) “規矩”之喻

(二) “臨帖”之喻

(三) “字、詩、治、三者合一”觀：李夢陽復古詩論的內在邏輯

三、李夢陽詩有“法”觀的意義——朱熹和李夢陽對詩法的思考之比較

四、李夢陽詩本“情”觀的意義

(一) 李夢陽詩論中“情”的含義

(二) “情”的來源

(三) “情”和“志”的關係

五、李夢陽“真詩”論的意義

(一) 李夢陽詩論中“真詩”的含義

(二) “真詩”論的意義

六、小結

結 論

參考文獻

本稿の課題設定と研究の出発点

明代の文学について、全体的に把握したいと思っても、それは実際には簡単なものではない。明代の文学は前期、中期、後期の三つの時期に分けられる。内閣・翰林が宋・元以来の文学観を受け継いで「館閣文学」を展開した明初から成化までの時期を前期とする。その後、担い手が六部の郎官らに移り、「学古」の文学と「師心」の文学とが対立しながら展開した弘治から万暦中期までの時期を中期とする。そして地方の文人たちによって庶民的な通俗文学が盛んになった万暦後期から明末までの時期を後期としている。中でも明代文学史上の変革期となったのが中期であった。その時期に文学形態（スタイル）の主流となったのがいわゆる「古文辞」、つまり「復古文学」である。このように古典の文学作品を重んじ、その模範的な詩文モデルを学ぶべきであると強く提唱したのが「前七子」の李夢陽（1473—1530）である。彼の提出した詩文論がいったいどのようなものであったか。それは一言でいうと、「真詩」という文学理論（以下、「真詩」論）である。

李夢陽と彼の詩論に対して、主なものを挙げれば、日本では鈴木虎雄、吉川幸次郎、横田輝俊、入矢義高、橋本堯、山口久和、松村昂、西村秀人、中国の国内では郭紹虞、章培恒、陳書録、廖可斌、台湾では簡錦松、香港では陳国球の先行研究がある。研究史的に見ると、これらの研究は、同様に李夢陽と彼の詩論を対象としても、それぞれの出発点が

違う。日本の研究者は、早くから李夢陽に注目し、その研究に着手した。周知の通り、これは日本の近世学術と明代の文学「復古派」との間に大きな関係があることに対して、研究者が特別の関心を持っているからである。一方、中国でも、1930年代から「新文化運動」の影響で「復古派」と「性霊派」に対する白話文学発展史的な意見が出され、それ以降本格的な文学史の研究が始まった。このように異なる起源を持っていたために、日本では特に思想史的な立場から李夢陽の詩論に対しての研究が多く、中国では文学史や文学批評史的な立場から李夢陽の生涯や「復古運動」の中での活動に対しての研究が多かった。ただ、中国では清初以来明代の学問に対しての嫌悪が続いてきたため、一般に「復古派」に対する評価は低かったが、1980年代中期から変化し始めた。この変化は章培恒が吉川幸次郎の論文を翻訳して中国で発表したことをきっかけにして起こった。

これらの先行研究によって、李夢陽の生涯や詩論に対する理解は進んできたのは確かだが、まだ解明できていない点も残っている。例えば鈴木虎雄が最初に提出した、李夢陽と王陽明との間にどのような関係があったのか、つまり文学の学古と心学の師心とはどのような関係があったのかという問題についてはまだ分かっていない。これを解明するために、まず李夢陽の詩論と宋代の理学との関係を解明しなければならない。そのためには思想史的に彼の「真詩」論に対する検討をしなければならない。そこで本稿では「真詩」という詩論が歴史の上にもどのように発展してきたのかについて考察をおこなう。

周知の通り、李夢陽以後、「真詩」は明の万暦から清の康熙にかけての文壇を象徴する言葉の一つとなった。しかし、「真詩」という言葉はこの時に初出したのではない。「真詩」が詩論の用語として初めて現れるのは、北宋末の阮閲『詩総』（＝『詩話総龜』前集）においてである。二つ目に現れるのは、金末の王若虚（1174—1243）が『滹南詩話』に引用する南宋の鄭厚（1100—1161）の宋詩批評の中においてである。それから三つ目には李夢陽が「詩集自序」に引いている王崇文の観点である。長い歴史を経ているにもかかわらず、李夢陽以前にただ偶然のように二回しか論述されなかった。その理由を解明するには、最初から「真詩」という言葉が生じた思想的背景を考察しなければならない。

第1章

阮閲『詩総』が「真詩」を言ったのは、『詩話総龜』前集卷三「志気門」に、李献民『雲斎広録』卷二の「唐御史」という詩話を引いている際においてである。しかし、李献民の原文には「真詩」という言葉が現れなかった。「唐御史」というのは、王安石に反対し、

貶謫された唐介である。彼の詩を杜甫の詩のような「詩史」というものと称するために、「真詩」という言葉を使ったわけである。この時の「真詩」は、「詩史」観の付属品であるため、独立した意味を持っていなかった。

第2章

王若虚が『滹南詩話』に鄭厚の次韻詩に対する批判を引用した。鄭厚の詩論観点は、彼の易学上の「対敵」という観点に基づいたものである。また、鄭厚は『孫子』に対して高い評価をしたことも、当時の詩文論の中で流行している観点で、彼の易学上の観点と一致している。鄭厚の『芸圃折衷』は、孟子など聖人を非難していることも、彼の易学をその論拠とするものである。朱熹は、鄭厚の聖人非難を批判しているが、鄭厚の言論にすべて反対するわけではなかった。その理由の一つは、鄭厚が金国に対して主戦する主張を持っていること、もう一つは、鄭厚の兄弟の鄭樵が『詩経』の序に対して疑問を持っているが、この態度が朱熹に大きな影響を及ぼした。

第3章

鄭厚の「詩韻」観は、彼の易学を詩論に反映したものである。同じ時代の晁説之や朱弁における「真」という言葉の用例を考察すると、鄭厚のいわゆる「真詩」が「偽詩」の対立的なものでなく、「正確な詩」を意味していることが解る。王若虚における「真」という言葉の用例を考察すると、王若虚にとって「真詩」は宋代儒学の全体を批判する立場から、宋詩を批判するための概念であることが解る。王若虚のいわゆる「真詩」は、詩の本質(=「情性」)を真実に反映した詩である。また、王若虚の詩論は朱弁(1085—1144)から影響を受けたものである。

第4章

詩文の価値をめぐる、北宋の理学者は、後世に大きな影響力を持つ詩文論を提出した。本章では周敦頤(1017—1073)の「文以載道」説、程頤(1033—1107)の「作文害道」説を例として考察している。これらのような作詩の価値を懐疑する観点は、朱熹の詩文論に大きな影響を及ぼした。朱熹(1130—1200)は、作詩に対して慎重な態度を採っているが、詩を学ぶ際に必要な手本を選ぶ方法も提出した。元代に入ると、呉萊(1297—1340)、黄潛(1277—1357)、そして彼らの弟子の宋濂(1310—1381)は「詩文の法」に対する意見を提出した。特に宋濂は、理学における「気」の理論を利用し、詩文の価値が保証される作る過程を考えている。明代前期の理学者は、北宋の理学者のように詩文の価値を否定する態度でなく、条件を付けて肯定する立場まで調整した。ここで薛瑄(1389—1464)

の「真情」観、陳献章（1428—1500）の「誠意」観を例として考察している。

第5章

李夢陽と何景明（1483～1521）との論争を考察すると、彼らの詩論は明初の宋濂が提出した論点を続いて討論していくことが解る。李夢陽の「規矩」や「臨帖」といった作詩法に対する比喻については、彼が詩と字を合わせて見る意識がその背景にある。「真詩」に対する追求は、彼にとって「三代の世」に対する憧憬でもある。李夢陽における作詩法上の学び順番と、朱熹のそれとは違う。李夢陽の順番は後代から前代へ様々な詩を学ぶゆえ、宋、唐、南北朝、漢など時代の詩を学ばなければならない。これによって、後世の詩の価値は学ぶ人に分かることになった。李夢陽における「真詩」は、「情」がすべて真実なものであるという観点によって、「情」を真実に反映した詩である。李夢陽はこのような「真詩」に価値があると考えている。「詩」の実質が「真情」であり、「治世」の「聖人」と今の詩人とが同様の「真情」を持つ以上、「古人の詩」に「聖人の道」が存在するとすれば、今の「真詩」にも同様の「道」が存在し、作詩の価値は大いに高められるのである。これは、李夢陽が提出した「真詩」論の最も重要な意味である。

本稿の結論

本稿の討論によって、以下のことを明らかにした。

理論を構築する方法から見ると、李夢陽の詩論は従来の詩論をさらに推し進めていることが解る。李夢陽は自らの詩論を確立し、それに基づいて作詩に対して肯定的な態度を採った。彼の「真詩」は、真実である「情」と内在する客観的な「法」とが併せて存在する詩を指している。この「真詩」論が後世に大きな影響を及ぼした点については、近い時代から順に学ぶことによって『詩経』だけでなく後世の詩文の価値も認識する可能性を提供したことに大きな理由がある。また概念的な面で「古人」と「今人」との間に厳格に存在した境界線を打破し、従来からの程頤＝朱熹の理学に囚われてきた詩文の作者をそこから解放する道筋を後世に示した点も見逃してはならない。

詩文論の中で、従来から『詩経』に代表されるような「聖人の道」と関わる詩の価値についてはみな認めてきた。しかし後世の人々が作った詩の価値については、その価値を保証すること、すなわち「聖人の道」に繋がることを必ずしも証明できず、ゆえにそれが作詩に対する考えの相違となって表れたのである。程頤の「作文害道」説による「束縛」から李夢陽による「解放」に至るまで、この点をいかに担保するかが争点であったとって

よい。

さらに、程頤から李夢陽に至るまでの二つの段階があったと捉えることができる。第一に程頤から朱熹までの学詩の手本（基準を定めるための時代区分の問題がこれに属する）をめぐって議論された段階、第二に朱熹から李夢陽までの作詩の方法（＝「道」との繋がりの探求、手本を学ぶ順番）をめぐって議論された段階である。朱熹による学詩の手本の選定とそれによる作詩の価値の萌芽によって分けられる。朱熹によってもたらされた作詩の可能性をめぐる議論を最終的に大成したのが李夢陽の「真詩」論なのである。

要するに、李夢陽が提出した「真詩」論の位置付けを確定するために、それを長い歴史の中に置いて考察する必要がある。また、李夢陽の詩文論の中で最も重要な部分は、「真詩」論である。この詩論によって、後世の「師心」文学の理論は始めて成立可能となった。最後に、阮閲や王若虚の「真詩」論は影響力が少ない理由については、彼らは李夢陽のように程朱理学の理論を利用して詩論を作ることをしなかったためである。